

教員から学生への 推薦図書

大学図書館にある本から学生のみなさんに読んでほしい一冊を紹介していただきました。
普段あまり本を読まない学生さんも思わぬ良い本との出会いになるかもしれません。



はじめての西洋ジェンダー史 家族史からグローバル・ヒストリーまで

弓削尚子 著
(山川出版社 2021)

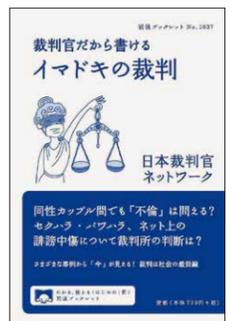
豊図開架 367.23:Y96

吉本 篤子
国際コミュニケーション学部

本書では、「ジェンダー」という視点から、ヨーロッパにおける前近代から近代、現代への移行の過程で、「女性らしさ」、「男性らしさ」、家族や身体へのとらえ方などについてどのような変化があったのか、また歴史学でこれまでどんな議論があったのかについて、過去の図書や絵画などを例にあげて論じられています。大学の入門的講義をもとに書かれているので、大学生のみなさんの入門書として大変読みやすい本です。

私たちがふだん漠然と意識している「男性らしさ」「女性らしさ」「女であること」「男であること」の意味は、普遍・不変のものではありません。それらが時代ごと、社会的集団(階層など)ごとにどう考えられてきたのかを知ることとおして、ジェンダー史研究の進展も学ぶことができるでしょう。

同時代のジェンダーをめぐる日本の歴史(思想史)についても知りたいという方には、渡辺浩『明治革命・性・文明——政治思想史の冒険』(東京大学出版会、2021、豊図開架 311.21:W46)もあわせておすすめします。



裁判官だから書ける イマドキの裁判

日本裁判官ネットワーク 著
(岩波書店 2020)

豊図文庫岩波ブックレット 327:N71

名図開架 327:N71

伊藤 博文
法科大学院



ニュースや新聞の報道で、裁判について疑問に思うことはありませんか? たえば、裁判で「同性カップルの間でも不倫は問える」のでしょうか? 著者である「日本裁判官ネットワーク」の裁判官がこの問いに正面から答えてくれます。裁判官とはかく浮世離れして一般市民とは縁遠いところで生きている人と思われがちですが、この本のようにイマドキな問いに正面から答えようとしてくれる人達もいるのです。裁判官ならではの視点で、イマドキの問題にQ&A形式でわかりやすく解説してくれます。法律を学ぶ人はもちろん、法とは縁がないかなと思っている人も一度、のぞいて見てはどうでしょうか? 裁判というものや裁判官への見方が変わるかもしれませんよ。



帝国軍人 公文書、私文書、オーラルヒストリーからみる

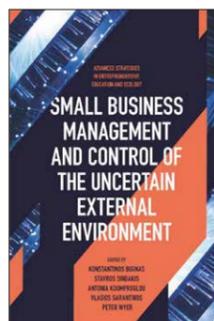
戸高一成、大木毅毅 共著
(KADOKAWA 2020)

名図開架 392.107:To17

大川 四郎
法学部



共著者のうち、戸高氏は、財団法人「史料調査会」を経て、現在、呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)館長であり、大木氏は雑誌「歴史と人間」の編集を経て、『独ゾ戦』(岩波新書)を著した現代史家である。「公文書、私文書、オーラルヒストリー」というサブタイトルが示すように、破棄を免れた旧陸海軍関係の膨大な各種文書の整理や、上は将官から下は兵卒に至るまで戦場経験者らとの面談に、二人とも長らくたずさわってきた。そうした経歴の二人が交わした対談をまとめたものが、本書である。文書を通じて見えてくる旧軍組織の特徴、文面に直接出てこない意図をどう読み解くか等々、興味深い視点が吐露されている。日本近現代史に関する異色の入門書として一読をお勧めしたい。



Small Business Management and Control of the Uncertain External Environment

Konstantinos Biginasほか 編
(Emerald 2022)

大北 健一
経営学部

中小企業(SME)が不確実性を増す外部環境にどのように適応できるのかという共通テーマのもと、各章の論文が関連する重要な問題を議論していますEmerald社から出版されたAdvanced Strategies in Entrepreneurship, Education and Ecologyシリーズの3冊目の論文集を今回ご紹介したいと思います。日本では馴染み深いなどの理由から大企業を題材にしてビジネスやマネジメントに関する教育・研究が行われていることが多いかもしれませんが、海外ではSMEを題材にした教育・研究も盛んに行われています。事実、SMEに着目した数多くの論文が国際的に評価の定まった海外の専門誌に掲載されています。本推薦図書を通じて、SMEの存続と成功にとって外部環境要因を特定してそれらに適応できることが不可欠であることを改めて学んでもらえれば幸いです。



経済学の宇宙

岩井克人 著
(日経BP日本経済新聞出版本部 2021)

豊図文庫日経ビジネス人 331.04:I93

塚本 恭章
経済学部



2015年に単行本として出版されたその文庫版。新たに巻末に補遺『「不均衡動学」の現代版に挑む』が所収され、著者の近年の研究動向を知ることができる。岩井は米国留学時代に主流派(新古典派)理論研究でいち早く頭角をあらわし、当該分野の「頂点」にたつも、主流派がその内部に抱える自己矛盾を見出し、次第にその批判へと転じた。その集大成として7年を費やし完成させたのが『不均衡動学』である。アダム・スミスの「見えざる手」の動きを促進すべく、資本主義を「純粋化」すればするほど効率性を増す反面で安定性を損なうという「効率性と安定性の二律背反」を宿命とするのが資本主義であり、不均衡動学はこのことを理論的に精緻に基礎づけた。主流派批判によって「頂点」から「没落」したと氏は語るが、そのことで研究領域が格段に広がり、楽しさも増えたようだ。半世紀以上に及ぶ岩井の学問的研究履歴をひとときわ鮮やかに綴った素晴らしい作品である。



わたしを離さないで

カズオ・イシグロ 著
土屋政雄 訳
(早川書房 2008)

豊図第2書庫2階 933:I73

安 智史
短期大学部

昨年、アニメーション作家の幾原邦彦が、2011年に制作したTVアニメ『輪るピングドラム』作中に言及があることを紹介しつつ、この本を推薦しました。今年もこの本を推薦します。

「これは並行世界ファンタジーの可哀想な子どもたちの話ではない。私たちの生きる世界にたしかに存在する現実なのだ」という幾原氏の言葉(世田谷文学館刊行のパンフレット『hontowa』VOL8(2020)より)に共感します。

なお、『輪るピングドラム』は今年に入って2部作の編集劇場版が公開されました。1995年3月のカルト教団の事件と、いわゆる宗教2世の子どもたちをモデルに、生命の格差問題などを問いかけた名作であり、作中には宮沢賢治『銀河鉄道の夜』、村上春樹『かえるくん、東京を救う』への直接の言及もあります。興味のあるかたはそちらもお読みいただければ幸いです。



見えない博物館

池澤夏樹 著
(平凡社 2001)[平凡社ライブラリー]

名図集密 914.6:I35

外部書庫 080:H51:398

下野 正俊
文学部



困った時に頼る本、というものがあ。それは辞書かもしれないし、教科書かもしれないが、何しろこれを開けば大丈夫、という本だ。私にとって、本書は、そういう一冊だ。私が本書をひもどくのは、必ずしもその内容のためではない。むしろ、その文体の故である。深夜に論文を執筆していると、ふと言葉に詰まる瞬間がある。そういうとき、私はこの本を手取る。そして、いくつかの端正な文(たとえば、「…絶対に行けない場所について想像してみることは一種の特権のようにさえ思われる…完全な暗黒、節のない時間の流れ…それを想像すると心が安らぐ。」のような)をそこに見出し、言葉の凜とした美しさに励まされ、書く力を与えられるのである。



ロビン・フッドの森 中世イギリス森林史への誘い

遠山茂樹 著
(刀水書房 2022)

豊図開架 208:Se22:E-7

斉藤 徹史
地域政策学部



本書は英国の中世の森が舞台である。森といっても、日本のような山林ではなく、平地林である。英訳すれば、woodやforestであろうが、中世では、前者が樹木の生い茂る自然の森を表したのに対し、後者は王の鹿狩りの禁漁区を意味した。王にとって、鹿は狩りの対象として手厚く保護すべきものであったのだ。本書は、中世のforestの歴史を振り返り、森と人間の関わりを考える。この本の魅力は、いきいきとした歴史の描写にある。ロビン・フッド物語から鹿狩りの猟場、御料林憲章などに至るまで、筆者は丹念に文献を渉猟し、森の歴史の断章を鮮やかに描きだす。読み終えると、爽やかな知的充足感を覚えることだろう。歴史を学ぶすべての学生に一読を薦めたい。



名古屋駅物語 明治・大正・昭和・平成～激動の130年

徳田耕一 著
(交通新聞社 2016)

名図開架 686.53:To35

吉川 剛
現代中国学部

本年は愛知県政150周年であり、名古屋市営交通100周年、鉄道開業150周年でもある。各種キャンペーンや記念イベントもあり、耳

目に触れた向きもある。電車・汽車・列車に注目するのの一興ではある。「名駅」は名古屋市中村区および西区の地名でもある。本書は駅に注目することで、陸上交通機関の歴史や都市部の整備・開発を知る上でも、よき入門書である。平成元年(1989年)に名古屋市制100周年記念事業として設置された「飛翔」の解体・撤去作業が本年(令和4年、2022年)6月から始まった。さらにリニア開業に向け名古屋駅周辺の再開発を前に、JR・名鉄・近鉄・市営交通、駅舎やバスターミナル、商業ビルなどを含め改めて「名駅」について考えるのも面白だろう。